

多摩の公民館今昔

公民館の誕生

文部次官通牒「公民館の設置運営について」から

戦後間もない1946(昭和21)年7月、当時の文部省から文部次官通牒として「公民館の設置運営について」が各地方長官宛に発せられ、これにより戦後の公民館制度が発足することになりました。

通牒本文の最初には、新日本建設のために「国民の教養を高めて、道徳的知識的並に政治的水準を引上げ、または町村自治体に民主主義の実際の訓練を与えと共に科学思想を普及し平和産業を振興する基を築くこと」の3点が明記されていました。

具体的には、公民館を全国の町村に設置、文化・教養と指導の中心施設、住民の交流、町村振興を目指す総合施設で町村民が自主的に運営等としていました。

また、同年9月に発刊された「公民館の建設」の著者寺中作雄氏は、公民館を社会教育機関、社交娯楽機関、町村自治振興機関、産業振興機関、青年養成機関の機能をもつ、公民の家と位置づけていました。

三多摩の公民館が培ってきたもの

文部次官通牒以後、三多摩では現在の立川市や小平市が対応を始めました。現在の小平市では、小平公民館条例を設置し取組を始めたのは1948(昭和23)年でした。最初は農家の庭先や学校の校庭などを利用した映画会などの他、農協と協力して農産物の品評会、野球や駅伝の他運動会など、館がなくとも活動できる「青空公民館」と呼ばれる活動内容が中心でした。

1960年代から1970年代では、東京を中心とする京浜工業地帯の発展や全国総合開発計画の背景をもとに首都圏に人口が集中しました。三多摩各自治体では人口が爆発的に増加すると共に、当時の公害問題が象徴するように、自らの生活環境に関する関心の高まりと当事者としての地域住民による相互学習の必要性を感じた新たな都市生活者が中心となって、生活者の各自治体に対し生活基盤と学習環境整備の強い要求が増加しました。

そのことから、設置当初想定されていた農村型公民館から都市住民の利用を想定した公民館の必要性や考え方の土台となった、いくつかの取組が起りました。

まず、1960年代のはじめに社会教育の研究者や教師や公民館職員が「三多摩社会教育懇談会(三多摩社懇)」として国立公民館を中心に活動し、新たに都市生活者となった三多摩の住民が求める学習の要件と学習施設像を、「公民館三階建論(1964年)」として理論化しました。

公民館三階建論で提示された具体的

な公民館像は、1階は住民がいつでも気軽に利用できたり場をイメージし、2階はグループ・サークルの集団的学習や文化活動の場、3階は社会科学や自然科学など系統的で体系的な学習内容をイメージしたとされています。

次に、1970年代のはじめに東京都教育庁職員、社会教育研究者及び三多摩の公民館職員が中心になって、当時の都市住民の学習要求を背景とした都市型公民館構想として、「新しい公民館像をめざして(通称:三多摩テーゼ 1973年、1974年)」が作成されました。

三多摩テーゼは、公民館を1.住民の自由な活動場、2.住民の集団活動の拠点、3.住民にとっての私の大学、4.住民による文化創造のひろばの4つの役割を提起しました。そして公民館運営の基本として、1.自由と均等、2.無料、3.学習文化機関としての独自性、4.職員配置、5.地域配置、6.豊かな施設設備、7.住民参加の七つの原則を明らかにしたものです。

三多摩テーゼは東京都教育庁から公民館資料作成委員会による報告書として発行されたこともあり、以降三多摩各自治体のみならず全国の自治体の公民館設置の理論的な枠組みとして大きな影響を与えました。

1980年代～90年代に明らかになった公民館の課題

東京都教育庁社会教育部(当時)が作成した「区市町村社会教育行政の現状」という資料によれば、区市町村の公民館数は1973年34ヶ所から1987年84ヶ所に増加しています。そして、三多摩各自治体では生活基盤整備の進展と共に住民からの社会的サービスへの要求も多様化し、特に学習や集会施設の設置要求に応えるため、自治体によっては公民館かコミュニティセンターのどちらかを選択

することになりました。そのような社会的背景から公民館に関する研究が進み、課題も指摘されるようになりました。

まず、1980年7月号の「地方自治通信」にて、三鷹市職員の江口清三郎氏と国分寺市職員の進藤文夫氏の間で、コミュニティセンターと公民館の違いを浮き彫りにした「江口・進藤往復書簡」があります。

江口氏から公民館の現状や課題について10の質問をし、進藤氏が答えるという形の往復書簡の中で明らかになったのは、公民館事業のあり方、地域の公共課題を解決するための学習に市民参加の仕組みの有無、公民館職員の専門性と力量形成、そして当時急速に普及し始めた公民館は、地域の住民自治を形成する本来の役割を果たすことができているのかということ等でした。

行政職員が住民の要求に応えるよりよい社会教育施設のあり方や社会教育事業に真剣に意見交換をし、あるべき形を見出すとしました。

次に、1986年8月に発刊された「社会教育の終焉」の著者法政大学教授松下圭一氏は、今日では都市型社会が成熟し農村地区も都市化し、すでに農村型社会から都市型社会に変貌している現在では、公民館が「教育」という枠組みからすべての行政課題を担うことは無理であり、住民に対し教養育という社会教育行政はなくても十分住民は自立していると、指摘しました。

そして、今日、公民館ないし社会教育行政にとって不可欠な認識は、1.社会教育行政ないし公民館がなくとも、市民文化活動は自立して存在している。2.市民文化活動の多様化・行動化のもとでは、社会教育行政による指導・援助はもはや不可能であるを指摘し、当時の社会教育関係者の中でも大きな議論となりました。

さらに、1996年4月に発刊された「現代社会教育の地平と生涯学習」の著者東京学芸大学教授長浜功氏が、「学習権の保障」という問題にかかわって行政がこれに責任を持つことは当然のことであるが学習すべてを行政の負担と責任に期待するというのは間違っている。いやもっと言えば真の学習は行政という枠のもとではできないということである。」として、「社会教育という不定形のよさ、それは行政や役人には到底理解できないことだ」とした上で、社会教育の活動は行政に期待するものではないと指摘しました。

日本では、バブル経済崩壊の直前である1990年に、いわゆる「生涯学習振興整備法」が施行されました。その後、行財政改革の視点から職員の削減や公の施設の民間委託などを背景に、公費で負担する社会教育から、個人々の興味関心に基づいて生涯を通して自己負担及び自己責任で学習という流れが強くなりました。また、多摩地域の各自治体でも女性センターなど多様な公的施設が設置され、社会教育全体の中の公民館の位置づけが相対的に変化してきました。

人間関係が薄くなった今日、求められる公民館像

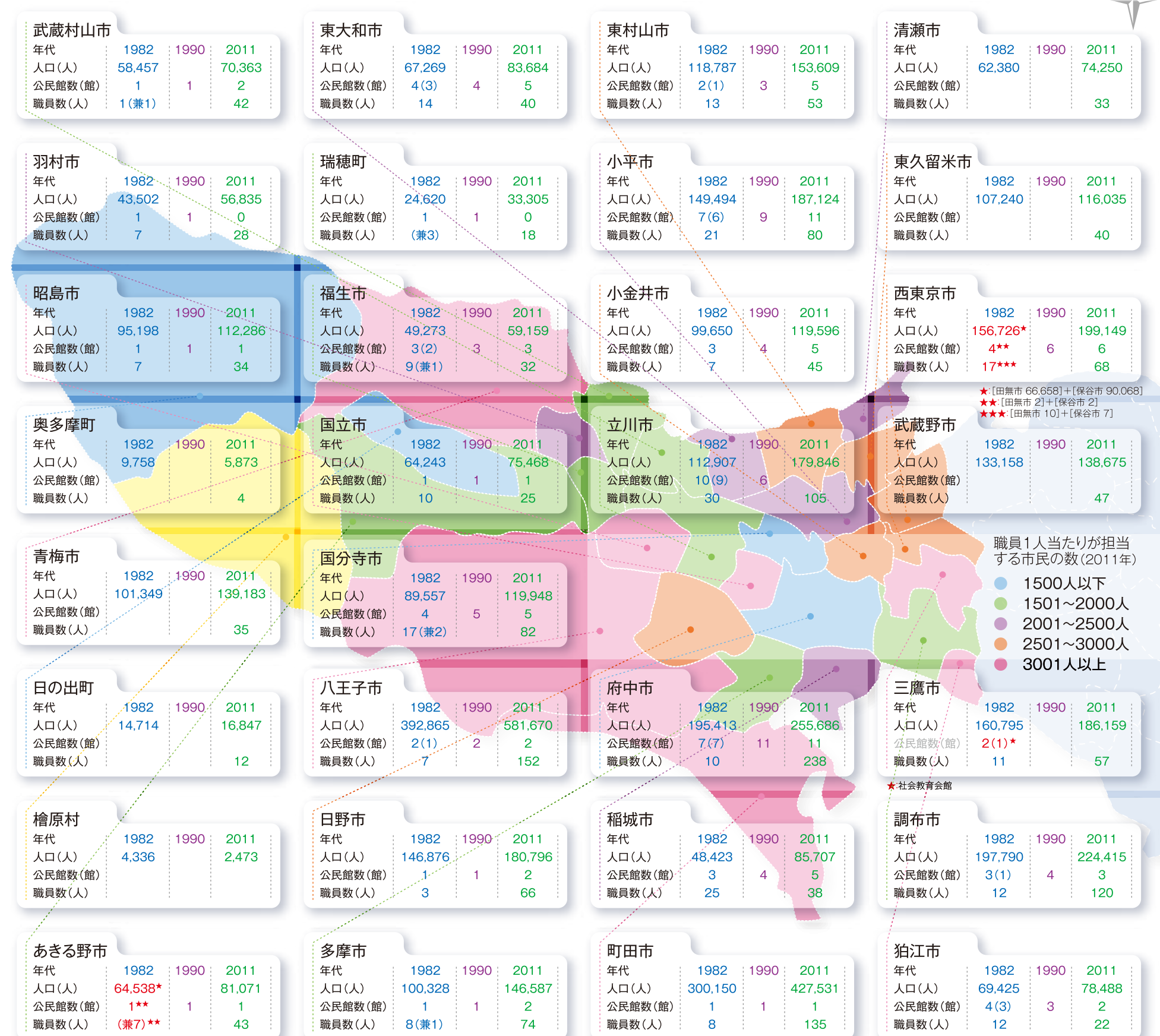
絆を求めながらも人となりにくい社会を前提として公民館の役割を考える時、一つには地域の住民が参加する運動会やお祭りといった、伝統的な地域社会の行事から地縁関係を再興する取組が考えられます。また、地域の小中学校や他の公共施設の機能を十分発揮できる情報共有と相互利用関係を築くことで、多様な要求を保障しようという取り組みも考えられます。そして、新たな公共施設の設置においては、子どもから高齢者までの健康領域をカバーする保健師や、少年や青年の相談に応じるカウンセラーなど、現代の複雑で多様な学習要求をカバーできる職員集団を構成する必要があると思います。

なお、地域社会での人間関係が薄いとはいえ、当事者として課題の解決に真剣に向き合う住民は必ずいると思います。そのような住民の居場所であり、出番のある社会・コミュニティづくりの場は、社会の変化によっても必ず求められるものだと思います。

現代的な課題に対応できる新たな機能と構造を併せ持つ施設が求められていますが、それは公民館という施設であると考えますが…

sphere 54 ●2 [データ]『多摩地域における公民館数の変化』

出典 ●『東京の公民館の現状と課題Ⅱ—公民館事業論の構築をめざして—』昭和58年3月31日発行 編集・発行:東京都立川社会教育会館
●『平成2年度 区市町村社会教育行政の現状—社会教育行政調査報告書—』東京都教育庁生涯学習部 人口部分は、東京都統計年鑑 平成2年
●『平成23年度 区市町村生涯学習—社会教育行政データブック—』東京都教育庁地域教育支援部生涯学習課 平成24年2月発行



sphere 54 contents

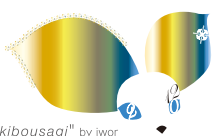
- 1 [論説] 多摩の公民館今昔 伊東静一 ●2 [データ] 多摩地域における公民館数の変化 ●3 [コラム1] 鳥の目玉 伊東静一 ●4 [レポート] 三多摩テーゼの「ふるさと」はいま… 朝岡幸彦
- 5 [コラム2] 指定管理者制度と公民館 岩松真紀 ●6 [コラム3] iHo-la! 社会教育デザイナー 高下由香 ●7 [湧水まっぷ] The Map of SPRINGS around Tama Area

伊東静一

Seiichi Ito

いとう せいいち ●1979年
から福生市公民館職員として子どもを対象に自然体験学習、大人を対象に自然観察会などを企画・実践してきた

社会教育デザイン新聞
[スフィア]
vol.54
2015年11月11日
編集・発行:社会教育デザイン研究社



54
Countdown
sphere ●3 [コラム1] 鳥の目玉

伊東静一

Seiichi Ito

「アトリ」のオス1年目の目玉

今回紹介するのは、スズメより少し大きめの鳥です。寒さが厳しい時期に川原や雑木林などでも観ることができますので、今年はチャンスかも知れません。嘴(くちばし)の付け根が黄色く、頭の黒い羽毛が精悍な顔つきを生み出しています。眼珠の虹彩に濁りが残っているため、1年目と判断しました。



〒183-8509 東京都府中市幸町3-5-8
東京農工大学大学院農学研究院 隣旗研究室気付
社会教育デザイン研究会
tel: 042(367)5877
e-mail: syakai-design-Sphere@live.jp